

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方 564

## アンナ・ポリトコフスカヤはどんな記事を発信していたか

### ■テロ有罪犯・ススハノフ

（記事について： アンナ・ポリトコフスカヤの最後の記事のひとつです。チェチェン人の若者たちが続々逮捕され、ロシア各地の強制収容所に送り込まれていきます。朗らかな大学生がいつのまにか「テロリスト」の嫌疑を着せられて……。その人々は今牢獄で絶望し、やがては全てを呪いつつ、生き残れば故郷に戻るのでしょうか。その時、何が起こるのか。「わたしは彼らの憎悪が恐ろしい。もっと恐ろしいのは 自分と同じ人間に、そういう憎悪を貯めるよう強いる者たちだ。憎悪は必ずあふれ出すのだから」と、彼女は書きます。翻訳してくださった方々に感謝します。（チェチェンニュース発行人）

<http://2006.novayagazeta.ru/nomer/2006/69n/n69n-s27.shtml>

### 民族が理由で投獄

テロリズムで有罪とされたイスラム・ススハノフの血には「チェチェンの臭い」

### わたしは憎悪が怖い

世界中が統御不可能な核反応を怖がっているが、わたしは憎悪が怖い。統御不可能で、蓄積を続けていく憎悪が。そのやり方はともかく、世界はイラクや北朝鮮のボスを処理するテコは思いついた。しかし個人的な復讐がたどっていく道筋は、誰も決して察していない。世界はこれに対してまったく無力だ。

わが国では、今まれに見る無責任な愚行が行われている一数百人の人々に、憎悪の念を蓄積することを強制し、そうすることで残りの人々の将来をまったく予測のつかないものに変えている。

「テロ」行為の罪で投獄されているチェチェン人たちをどうしようとしているのだろうか？ まだとても若い数百の人たちには、まだまだ長い刑期が控えている。収容所では憎まれ、そのために彼らに対して「特別なあつかい」が練り上げられている、それは同房の者たちや管理者の側のいずれもがありとあらゆることを考え出しているのだ。

なぜ「 」つきのテロなのか？ それを説明しよう。

### 三つ目の戦争

このチェチェン人たちとはどういう人たちか？ 大部分が、かつての大学生たちだ。捕まる前の人生経験は、3つの戦争以外はないに等しい。子供の頃（第一次チェチェン戦争）、第二次チェチェン戦争がティーンエージャーのころ、そして三つめの戦争とはこの取り調べという戦争だ。

つまり、こういうことだ。これらの学生—「テロリスト」たちは2002年、2003年、2004年の間に行われてきた違法な様々な手続きの産物なのだ。この時期、北コーカサスでの法律運用は極めて特異なものだった。大量の一斉検挙—チェチェンで一度に数十人ずつ学生たちが「掃討」された。そのあと「掃討」された者たちは拷問に掛けられた、これは衛生検査とおなじくらい当たり前のこととして。多くのものが消された—主として自供しなかった者たちが。「正直に自白した者たち」は、悪意たっぷりになすりつけられた「罪」のために有罪とされた。そうした取り調べの書類の質は問われなかった。その通りなのか？ そうでないのか？ 罪が有るのか？ 無いのか？ それは神のみぞ知る、本格的な取り調べというものは一切なかったのだから。

そして2005年からすべての破毀審（касаций）をおえたあと、「掃討」されたチェチェンの学生たちの世代が各地の刑務所に送られるようになった、すべて15年以上の刑期で。そこで彼らの第4番目の戦争が始まった。自分自身との戦いだ。自分を守る戦いかもしれない。いや、自分に対する戦いか・・・今、2006年にこれらの施設からはいつてくる情報によると、かつての模範的な少年たちは、すでに悪質な累犯者に似てきているようだ。

### イスラム・ススハノフの場合

その典型的な例を挙げてみよう。1984年生まれのイスラム・ススハノフ。彼に会ったことはない。今はそれは不可能になってしまった。ロシアの監獄当局であるФСИНは、この種の受刑者とのいかなる接触も禁じている。紙の資料によって再現してみる。

1999年、戦いが始まる直前、イスラムは グロズヌイの第38学校を卒業した、大学進学のためにサラモヴァ校長が書いた内申書ではとても良い少年だったとお決まりの言葉を書いている。「授業中はとてもきちんとしていて勉強家で実行力のある生徒だった。一生懸命勉強していた・・・ 尊敬されていた・・・ 何か頼まれれば責任をもってそれを果たしていた・・・」

2000年に、イスラムはチェチェン教育大学に入学、激しい戦闘があったあと新入生の募集が再開されたのはそこだけだった。芸術学部に入った。そこでも「勉強も学部や大学のそのほかの活動にも積極的に参加・・・ 絵画や構成、彫刻に特別な興味を示し、将来性のある学生・・・」と書いたのは芸術学部の学部長代理のスレイマノワだが、こ

これは既にイスラムが「爆弾」のことで「掃討」されてからレーニン地区の検察あてに書いたもの。

おなじ検察にあてた、サッカーチーム「ヴァイナフ」のヘッド・コーチのインデルビエフの上申書もある。「サッカーチームに来ていたときの彼はいつもお行儀の良いきちんとした青年だった。イスラムが参加しているサッカーチームと試合に遠征することがあった。短気なところも、攻撃的なところも全くなく、とても内気で控えめでおとなしい子だった。過激な行動に参加するなどの傾向はまったく示していなかった」

コーチも学部長代行も、うそをついていたのだろうか？あるいは経験豊かな人たちとはいえ、天使のような面の下に悪魔の顔が隠れているのをうっかり見過ごしたのだろうか？内申書の内容と起訴状の内容はまったく両立しない。こんなことを同じ一人の人間が全部やることはとても間に合わない。有望な学生で、サッカーの遠征試合に出かけて行きながら、教育大学の学友たちとロシアの軍人を吹き飛ばすために手作りの爆破装置を作っていることなど。訴追によれば、武装勢力のススハノフを保護観察にとどめておくことなどできない。かれの本当の趣味は彫刻とはほど遠い。

### 矛盾に満ちた証拠と「自白」の採用

ススハノフについてのエピソードが3つある、「ギャンググループ」の刑事事件、このグループは「身元の確認できない"アブドゥルアジム"」に指揮され、「出所不明の資金」で活動している。すべてのエピソードの根拠は彼の「正直な自供」だ。判決から判断すると裁判所は、詳細を確かめもしなかったようで、これらのエピソードが検察側が最初に叙述したとおりに、判決文にそのまま入っている。

ススハノフは以下のことを認めた。2002年6月6日グローズヌイ市のジュコフ通りの破壊された建物に手製爆弾をしかけた、それは6月9日に（ここで具体的な名前が入っている）ペンザ方面からきている警察隊を吹き飛ばすためであった。もっとも、その人たちは判決を読みつつ、なぜかその場で、まさにその場所でその年の3月9日に爆破された、と主張していた。6月9日にはすでにチェチェンよりずっと離れたところで受けた負傷の治療はおわっていた・・・いったいどういう理解すればいいのだろうか？

「2002年8月3日 検問所の銃撃」というエピソードもまったく同じたぐいの法的な混乱がある。まさにその日に負傷した警察官たち（これも苗字と職位がしめしてある）は彼らは自動小銃で8月3日に銃撃されたと主張し、受けた傷もその証言に合致している。ところがススハノフは、「自分は検問所に向けて擲弾筒を撃った」と自白しているのだが、どうしてもどういう角度で、どの方向に検問所があったか思い出せない・・・

3つ目のエピソード。2003年12月13日の出来事。ススハノフはギャング集団

の仲間と一緒にブティリン通りで現行犯で捕まった。前日に設置した爆破装置の電池を交換していたところを。彼らを捕まえた二人の警察官たちは「裁判では「(爆破装置を)ブティリン通りで12月14日に押収した、これは古くてほこりまみれだった」と報告している。「作戦上の情報を」調べるために、押収した・・・

それがどうかしたか？ なんでもない。本質的に誤ったままで、判決には法的効力が生じた。(一連の作業をした)「製造会社」は、取調官—ゴルチハノフ(グローズヌイ市レーニン地区検察)、裁判官—V. アブバカロフ(チェチェン共和国 最高裁判所)。わたしがススハノフを弁護しようとしていると思われるだろうか？ よくわが国でいわれる「味方の兵士たちを殺している奴」の弁護を。

そうではない。こういう質の裁判と取調べでは、イスラム・ススハノフだけが彼は何の罪を犯したのか、犯していないのかを知っていて、ほかには誰にも分からないというそのことが問題なのだ。

わたしは皆に知っておいてほしい。どんなイデオロギーのソースをかけて料理しても、法律や権利に暴力を加える免罪符は誰にもないとわたしは確信している。法律や権利に対する暴行は、空恐ろしい結果をもたらすことになる。犯罪を犯した者は常に、有罪にされた、と叫ぶチャンスが残され、身の程をわきまえさせる＝罪を素直に認めさせることは、何によってもできない。そして、無罪なのに有罪とされた者たちは、気が狂っていくだけだ。

### 刑務所で作られていく「罪」

ススハノフは14年の収容所での嚴重規則(「嚴重規則」は、一般規則、嚴重規則、特別規則という刑務所の規律の重さのカテゴリーを指す)での服役という刑を受けた。チェチェン関連のすべてのリスト通りの罪状で「ギャング」「テロ」「違法な武装勢力」そのほか。2005年の12月から彼はスヴェルドロフスク州の収容所に居る。3ヶ月間は矯正収容所5(ニージニー・タギル)、ここで3ヶ月間独房に入れられる。となりの独房もおなじような罪状の若いチェチェン人たち。ススハノフの母親アマンタが、週に2回書留を送るがススハノフには渡されない(このことは後から調べて分かった)。管理者は恥じらいもなく、ススハノフに申し渡した、これは今後どのチェチェン人に対しても同じようにする、刑期が開けるまで。2006年3月7日、ススハノフは自殺しようとした。5月21日にもう一度。祈りをあげることは禁じられていた、そのことで手錠をかけられ、懲罰独房に入れられた。矯正収容所の管理局によると、受刑者ススハノフの評価は否定的だ。

スヴェルドロフスク州検察庁のワシリエフ刑罰執行適法性監督部長が、刑事犯の処罰

執行の合法性を管理するために書いたもの。「12の項目で懲戒処分を受けている。懲戒処分の理由は、検察庁によって適法で根拠のあるものと認められた」ススハノフは反抗を続けている。集団で「手首を切る」ことに参加する。収監条件に抗議する身体損傷。スヴェルドロフスク州の人権全権T・メルズリャコヴァがやってくる。ススハノフと面会すると彼は不当な判決を見直し、祈りをあげることを許可し、殴らないようにしてくれと要求しているだけだと訴えた。そのあとメルズリャコフは自分が会って話をしたチェチェンの受刑者たちの母親に当てて絶望的な手紙を書く：「これらの収容所からできるだけ早くチェチェンに近いどこかほかへ息子たちを移送してもらおうよう急いでФСИНに要求しなさい。そして私自身も、ФСИНの長官カーニン・Yuに訴えることにする」

カーニンはこれを拒絶し、ススハノフは矯正収容所12-「特に危険な累犯者」用の収容所に移される。このように初犯のものと累犯者たちと混ぜて収監することは法律で禁じられているはずだ。矯正施設というもともとの意味を念頭に置くとすれば。

しかし、ススハノフの個人記録には、そのときまでに細かい評価がどっさり加わっていた。いわく「逃亡の危険」「人質を取る危険」。

「はにかみがちの、控えめで優しい」2004年の少年は、2006年には、犯罪を繰り返したわけでもないのに反抗的な累犯者になってしまった。もっともこれらの評価を信じれば、ということだが。

(訳注：1度犯罪を犯せば前科者になる。前科者が犯罪を繰り返すのが累犯者で、刑罰も重くなる。したがって、「初犯」で「累犯」扱いはおかしいということを行っている。「初犯」も信じていないわけだが)

### 私たちは何を期待しているのか？

私たちはススハノフに何を期待しているのだろうか？ これらの「掃討された」人たちに？ 彼らが収容所で朽ち果ててしまうことか？ どうして彼らは祈りを捧げてはいけないのだろうか？ 彼らとその信仰を後戻りできないほど確立するようにこっそり祈りをあげることを期待しているとしても？ それとも子供の頃から教えられてきた祈りを忘れることか？ そして他の祈りを捧げるようになることを？

ススハノフが釈放されるとすればそれは2017年だ。そのとき彼は34才。他の者たち、同じ「掃討された」世代の者たちも同じ頃に収容所を出てくる。35才か37才で。社会に戻るとき独身で、子供もなく、教育もなく、職業もない。しかし、心の底には煮えたる思いを秘めているだろう。人生をめちゃめちゃにされた、正義などない、という思いだ。

「・・・本質的にはこういう矯正収容所は、今や有罪判決を受けたチェチェン人たちの強制収容所と化しています」

と、有罪判決をうけた者の母親たちが編集部の手紙を寄せている。

「あの子たちは民族的な差別を受けています。独房や懲罰房から出してもらえません。規則違反をするように挑発されるんです、規則を守らせてもらえない・・・大部分、ほとんどの規律違反や『事件』はでっち上げで、証拠がありません。厳しい条件におかれ、人間としての尊厳を踏みにじられてあの子たちの中に、すべてに対する憎悪がはぐくまれています。これは矯正ではなく、絶滅です・・・人生を台なしにされ、意識をおかしくされた人たちの大群が戻ってくることになるんです・・・」

この母親たちは何を書いているのか理解している、母親たちだけが彼らと腹を割った話ができる、それも一年に1回か2回。わたしは彼らの憎悪が恐ろしい。もっと恐ろしいのは自分と同じ人間に、そういう憎悪を貯めるよう強いる者たちだ。憎悪は必ずあふれ出すのだから。

2006年9月11日 アンナ・ポリトコフスカヤ

#### ■[ロシア軍]アンナ・ポリトコフスカヤ筆：「軍検察庁に誘拐された兵士」

彼は自分の友人殺害の唯一の目撃者ということになった。

記事について：ポリトコフスカヤの、今年9月11日の記事です。チェチェンに直接関係する記事ではありませんが、ロシアに残る徴兵制の現実が語られています。最初に将校に殺された兵士ジーマの母親の慟哭。そして、殺害を目撃し、その結果軍に幽閉されたジーマの友人オレグの母のやり場のない思い。アンナ・ポリトコフスカヤが、どんなものを取材で拾い上げようとしたかがよくわかる短い記事です。翻訳してくださった方々に感謝します。(チェチェンニュース発行人)

<http://2006.novayagazeta.ru/nomer/2006/69n/n69n-s25.shtml>

#### 行方不明の息子

あの子がどこにいるかを知る権利もないのよ！

オレグがどういうことをしてかしてしまったというの？ 酔っぱらった将校がジーマとあの子に襲いかかった後で奇跡的に生き残ったのが悪いっていうの？

リュドミーラ・ステパノヴナ・シェメルダは泣いている。電話の向こうで。これはシクティヴカル市、パンチレーエフの家からだ、ジーマ・パンチレーエフはモスクワ郊外のルホヴィツィの鉄道部隊32386で、この8月の始めに死亡した。オレグ・シェメルダは、ジーマの殺害の主要な目撃者だ。

ジーマとオレグは 新兵として集合するとき、故郷のシクティヴカルの集合所で知り合い、その後同じ部隊に配属され仲良くなった。いつも一緒にいて、励まし合い、助

け合い、守ってきた。この11月に2年の兵役義務がおわるころだった。

部隊がすべてうまくいってないのは知っていました。—そう語るのは ジーマのおばさんでタマーラ・アレクサンドロヴナ・ミンガレエヴァー。「中隊長（あの子たちは「デブの将校」って手紙に書いてました）がいつもお金をゆすりとっていたことを知っていました。あの子たちが殴られないために私たちはお金を送っていました、最後はちょうどジーマの誕生日だった。ジーマは結局そのお金をもらわなかったことが後から分かりました・・・」

この夏のあいだ、中隊長のニキーフォロフは、地元の木材業者のところにジーマとオレグを何度も働きに通わせていた。朝はこの賃仕事にいかせ、夜は部隊に戻る。誰がその労賃をもらっていたのか分からない（捜査では確認できていない）もっとも、子どもじゃあるまいし、想像はできるけれど・・・

## 殺人

8月4日もすべていつもの通り、ただ中隊長は酔っぱらっていて、部隊では鉄道関係者の日のお祝いに入っていた。兵士たちが賃仕事から戻ると、ニキーフォロフがシェメルダとパンチェレーエフを自分の執務室に呼び、二人を殴り始めた。まずシェメルダを。その衝撃でオレグはドアを突き抜けて廊下まで突き飛ばされ—どんなに強い殴り方が分かる—そこで意識を失った。

これが命拾いさせた。カッとなった隊長はシェメルダ（オレグ）を追いかけず、バケツに水を入れて持って来て、オレグにぶっかけろと命じた。命令が実行され、兵士の意識が戻ったとき、友人のジーマはもう意識を失っていた。ジーマ・パンチェレーエフは昏睡状態で、意識が戻ることなく8月8日の明け方、ルホヴィツィの病院で亡くなった。多数の打撲による脳の浮腫と、頭蓋骨の外傷、下あごの骨折が認められた・・・。

「あたしたちは、あまりにどうでもいい庶民なの・・・」

ジーマのおばさんタマーラ・アレクサンロヴナが話をつづける。

「ジーマのお母さんは塗装の作業員だし、わたしは社会福祉関係で仕事をしている。軍の部隊でなんてひどい侮辱をうけたことか！ おかあさんがどんな状態か分かったはずなのに、今もここにいるけど、口も利けないの。ターニャ（タチヤーナ・ドミートリエヴァ・パンチェレーエヴァ。ジーマの母親）の一人っ子だった。将校たちは、同情どころかわたしたちのこの悲しみにまったく冷淡、ジーマが亡くなったことの責任者だってまったく同じ。その人に会わせてもらったのは、葬儀の前の8月11日、しかも検屍結果の閲覧は許可されなかった。この事件を扱っている取調官（コロメンスコエ守備隊検察庁の取調官のV. レパン）は、ジーマは病気だった、それでああいうことになった、

とほのめかしたの。病気ですって！ 軍隊に取ったんだから健康だったわけでしょ？ 殺してしまってから、つまり、病気になったってわけ？ ありとあらゆる証明書を集めたわ、診療所で外来のカルテももらってきて、どこにもなんの疾病もみつからなかった・・・ 何をしようっていうの？ まさか、殺人を正当化しようってんじゃないでしょう？」

ジーマとオレグに起きたことについて、生き延びた兵士オレグの母親リュトロミーラ・ステパノヴナ・シェメルダは、ジーマの葬式に呼ばれて初めてジーマの身内からことの次第を知った。そうでなければ部隊からは誰も何も知らせてこなかった。

### どうして犯人ではなく被害者を監禁するのか？

「わたしはルホヴィツィに出かけて行きました」—オレグのおかあさんが語る—「息子はどこにも居ないんです。あるとき指揮官が最初に言ったことを決して忘れません。「あなたの息子のおかげで休暇から呼び戻されたんだ」すっかりむくれていました。わたしたちにどうしろっていうんです？ 検察ではこう言うんです『オレグ君はわれわれがかくまっています。もう別の部隊に移しつつあります』。」

どうしてそんなことをしているんでしょう？ 理解できました？

「オレグのことをニキフォロフ大尉の兄弟たちで、やはり将校連中がつけねらっているってことでした。でもこれっておかしいんです。もし将校たちがつけねらっているんだったら、その将校たちをどうして拘束しないの？ そうする代わりに息子をどこだか分からないところに人質のように閉じこめておくなんて。検察で言われました「あなたは息子さんがどこにいるか知らない方がいい、彼の安全のためだ」と。でも、わたしは息子との面会を要求しました、彼が生きているのか知りたかったんです、長いこと懇願してやっと面会を許されましたが、検察官同席ということでした。二人きりで話す権利はありませんでした。

「彼は何かで告発されているんですか？ 逮捕されたわけじゃないんでしょう？」

「もちろん違います。彼はむしろ被害者です。それも精神的な、だって友人を殺されたんですよ。そして肉体的にも被害をうけている、それになにしろ主要な目撃者なんです」

監視のもとで行われた短時間のこの面会の際の息子は肉体的にも心理的にも悲惨なものだったとリュドミーラさんは言った。

「わたしはもうホントにぞっとしました。すっかりやつれ果てて、神経がぴりぴりしていて、憔悴している。私に言ったのは、具合が悪いと言うこと。そして、モスクワのどこか分からないところに連れて行かれて、そこの医者が診断を下した。脳のこめかみから脳天にかけての血腫と。でもまったく薬はもらっていないって。あの子が生きている

のか、どんな状態なのか分かるためにどこに電話したらいいのかわかりません」

コロメンスコエ守備隊の検察は、ニキフォロフ大尉事件についても、殺人罪に問われている将校ニキフォロフの兄弟たちの行動についても一切コメントを拒絶し、現在兵士シェメルダがどこにいるのか、何が起きているのか、彼はどういう扱いを受けているのか、誰が治療しているのか、一切語ろうとしていない、という以外何もそれ以後つけくわえることはない。

こういうすべてのことは鳥肌がたつほど恐ろしいことだ。赤い星の絵が描かれている鉄の門が守っている、入ることのできないところで、大事な目撃者を相手に何をしでかしているのだろうか？ この証人はどんな自供書にサインするのだろうか？ 取調側は何を突き止めるというのか？

軍が、この将校を攻撃から少しでも逃れさせるための作り話をつくりだそうと懸命に知恵を絞っているということは明らかだ。「スイチョフ事件」で国防省は教訓を汲み取り、チェリャビンスクで犯した「手抜き」を繰り返したくないのというのははっきりしている。

たしかに、ニキフォロフ大尉はほんの少し殴っただけで、そのほかのすべての結果がおきたのはジーマ・パンチェレーエフの「遺伝的な病気」のせいだったと言ってはいけなはずはなかろう？ アンドレイ・スイチョフの数多くの苦しみの物語でこのような「変身」がどれだけあったことか、国防相が、軍内部で起きている罪のすべてを「程度の悪い国民」一軍の部隊に酒を飲み、けんかをするためだけにやってくる、身体も頭も弱く、教育もない兵士諸君に着せてしまうことができるように、そのためだけにこれらすべてが行われている。

### 動きのとれない人々

今、ジーマ・パンチェレーエフの死亡事件についてこのような作り話が作られるにはまさに都合のいい時期だ：ジーマは墓の中、家族はショック状態、検視の書類は家族に見せない、ジーマの母親、タチヤーナ・ドミトリエヴナ・パンチェレーエフはそれを取り立てられる状態ではない、つまり、好きなようにどうにでもしてくれと言う状態、そして脳血腫のある肝心の目撃者も完全に手の内にある・・・

このような図式から、すべてが納得できる。オレグ・シェメルダをそのおかあさんから隠し、面会では二人きりで話させない、ということを説明できることは他にあり得ない。編集部は「母親の権利」基金に対し、取材協力に感謝する。

2006年9月11日 アンナ・ポリトコフスカヤ

2006年11月13日記

